

熊本大学における「フレンドシップ事業」の実践

大迫靖雄*・木原信市**
吉田道雄**・中山玄三**

The Implementation of Friendship Project in Kumamoto University

Yasuo OHSAKO, Sinichi KIHARA, Michio YOSHIDA, Genzo NAKAYAMA

「フレンドシップ事業」は、子どもとのふれあいをとおして、「実践的な指導力を育成すること」を目的として、平成9年度から新たにスタートしたものである。文部省から全国の教員養成学部を実施の呼びかけがあり、熊本大学では教育実践研究指導センターが計画書を提出していた。これに対して予算措置が講じられたため、後期の授業として実施することになった。

具体的なスケジュールに当たって、事業本来の趣旨を踏まえ、次の4点を重視した。

- (1)グループ・ダイナミックス的な手法による児童・生徒との対人関係能力、いわゆるヒューマン・スキルを中心としたリーダーシップの改善・向上。
- (2)環境教育に重点を置いた自然体験。
- (3)集団活動の体験と集団運営技法の習得。
- (4)児童・生徒とのふれあい活動による児童・生徒の考えや行動の理解。

この事業は、単なる研修や教育実習の一環ではなく、正規の授業として単位を認定する点に大きな特徴がある。定員を30名として受講者を募集した結果、4年生を中心に31名から受講届けが出された。その内訳は、4年生24名、3年生3名、2年生4名で、このうち女子が26名で84%を占めている。土曜日と日曜日を含む日程であること、シラバス等による学生への情報提供が行われていなかったことなどから、学生の募集に際しては、当初はかなりの不安があったことは否めない。「このごろの学生気質を考えると、土・日の日程など組んでも集まらないだろう」といった否定的意見があったのも事実である。こうした状況の中で、センター専任の一人は、担当する授業の中で参加を呼びかけるに当たって、「こうした

評価をされて黙っているのか」といった、かなり過激な発言をしたほどであった。こうした発言の効果のほどは分からないが、最終的には31名が受講届けを出したことを知ったときには、ある種の感動を覚えたほどである。

本稿では、こうした経緯を経て行われた「フレンドシップ事業」の実践の過程と、その効果について検討する。

全体スケジュール

表1は、フレンドシップ事業全体のスケジュールである。全体として6つのコースが設定された。学生たちはそのすべてに参加することを原則にした。通常の授業と違い、不規則なインターバルで、しかも土日に行われるため、各コースの前には全員に電話し、出席の確認を取った。

熊本県立天草青年の家(11月8日、9日)

熊本県立天草青年の家では、「集団活動の体験集団運営技法の習得」が目標として設定された。当該施設には社会教育の視点から子どもたちを指導する専門スタッフがいる。こうした専門家の指導のもとで、集



写真1

* 教育学部長

** 教育実践研究指導センター

団活動の実際を知るとともに、集団を効果的に運営するための実践活動を体験することになる。

天草郡大矢野町上北小学校（11月29日）

上北小学校では、環境教育に重点をおいた自然体験に焦点が当てられた。具体的には、野外で子どもと直接ふれあい、ともに自然体験をすることによって、環境についての理解と環境教育の具体的な展開法について、基礎的な指導力を身につけることが目標とされた。このため、大矢野町教育委員会と連携し、天草郡上北地区の「上北祭り」に参加した。



写真 2

熊本大学教育学部附属中学校（12月6日）

附属中学校生徒が自主的活動として計画した近隣地区を清掃するボランティア活動に参加した。当初は、附属中学校で行われていた選択教科に参加し、生徒との関係を築くとともに、新しい実践的指導法のあり方を知ることが計画されていた。ところが、附属中学校の選択教科は11月中に終了することになってしまったため、フレンドシップのスケジュールと調整がつかなくなった。このため急遽、生徒が主体的に企画したボランティア活動に参加することになった。



写真 3

表 1 シンポジウムの日程

| | | |
|--------------------------|------------------|---|
| 1. 日 時 | 平成10年 3 月 3 日（火） | 13:30～17:30 |
| 2. 会 場 | くすのき会館（熊本大学構内） | Tel 344-2111（熊本大学） |
| 3. 日 程 | | |
| （1）開会挨拶 | 13:30～13:40 | 熊本大学教育学部長 大迫 靖雄 |
| （2）特別講演 演 題 | 13:40～14:40 | 「自然と子供と人々とのふれあい」 —映画「原野の子ら」でのふれあい体験を通して— 附属小学校非常勤講師 鳥飼 美帆 |
| （3）実践報告 演 題 | 14:50～15:50 | 「信州大学におけるフレンドシップ事業」 信州大学教育学部助教授 土井 進 |
| （4）パネル討論 テーマ パネリスト | 16:00～17:30 | 「熊本大学におけるフレンドシップ事業と今後の課題」 熊本県立天草青年の家 専門職員 藤野 健治 熊本市立出水中学校 校長 山下 一郎 天草郡大矢野町立上北小学校 校長 松村 誠一 熊本大学附属小学校 教諭 前田 康裕 熊本大学附属小学校 教諭 西澤 悦子 受講学生 下別府孝行 永野 薫 吉田 道雄 |
| 司 会 | 教育実践研究指導センター助教授 | |
| （5）閉 会 | 17:30 | |

熊本大学教育学部附属小学校（教育実践研究指導センター 12月20日）

附属小学校児童（3年生）とコンピュータ操作を楽しむ。会場は教育実践研究指導センターのコンピュータ教室で実施した。ここでは、効果的で実践的な教育を展開するための、コンピュータ活用の実践を知るとともに、コンピュータを仲介にして子どもたちとのふれあいを体験することが目標とされた。

出水中学校（1月31日）

公立中学校に出かけて、生徒と直接対話するとともに、リーダーシップのあり方を実践的に体験することを目的にした。具体的には、子どもたちと小グループをつくり、「自分を知らせる、他人を知る」というテーマでグループ・ワークを行った。

特別講演（1月31日）

熊本県教育庁社会教育課長谷川和弘課長を講師に迎え、「社会教育施設における子どもたちとのふれあい」のタイトルで特別講演を企画した。これによって、将来の教師志望の学生に学校教育とともに重要

な役割をになう社会教育に対する理解を深めることを期待した。

シンポジウム（3月3日）

本事業全体のまとめとして、シンポジウムを開催した。ここには、事業関係者と受講生だけでなく、教育学部教官、大学院生、学部学生の多くが参加した。具体的なスケジュールは表2に示す。



写真5

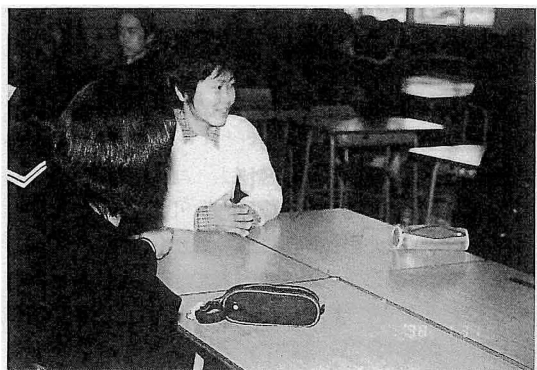


写真4



写真6

表2 フレンドシップ事業日程

1. 11月8日（土）～9日（日） 県立天草青年の家 主催行事「遊びの鉄人」
8日：学部8時30分出発
9日：15時帰着
2. 11月29日（土） 天草郡大矢野町上北小学校（環境教育）
学部8時00分出発 19時00分帰着
3. 12月6日（土） 附中学生とのボランティア活動への参加
4. 12月20日（土） 附小児童とのふれあいコンピュータ（会場：センター）
5. 1月31日（土） 公立中学生とのリーダーシップ講座（出水中学校）
特別講演
熊本県教育庁社会教育課 課長 長谷川 和弘 氏
演題「社会教育施設における子ども達とのふれあい」
6. 3月3日（火） シンポジウム（会場：くすの木会館）
特別講演・実践報告・パネル討論

結 果

今回実施した事業については、各コースごとに参加者からレポートが提出されている。また、天草青年の家および上北小学校の場合には、子どもたちからの感想文も得られている。いずれも、そのすべてが本事業の体験を肯定的に評価している。その詳細については、「平成9年度熊本大学教育学部フレンドシップ事業報告書」(熊本大学教育学部附属教育実践研究指導センター・熊本大学教育学部)を参照されたい。

ここでは、参加者たちが事業全体を振り返って記述した感想文を、本事業の効果を知るための手がかりとしてあげることにする。

受講者1. 教育実習とは違って、自分自身が自然体で子どもたちに接することができたと思う。また、子どもたちともたくさん話ができて、教育実習では見ることができなかった子どもたちの一面をみることであったのではないと思う。演習の回を重ねるごとに「次は、どんな子どもたちに出会えるのだろう」と、楽しみで、楽しみで、休みの土曜日に出かけなくてはならない事も、全く苦にはならなかった。毎回、帰るときは「参加してよかった。楽しかった。ずっと子どもたちと一緒にいたい」という気持ちでいっぱいだった。演習は、全て参加したがまだ、足りないくらいである。もっと回数が多かったらよかったのと思う。演習では子どもたちと十分に触れ合えただけでなく、学校と地域・家庭とのつながりの大切さなどについても学ぶことができたと思う。これらの経験を、今後自分が教師になったときに生かしていきたいと思う。

受講者2. 今回の演習では、天草青年の家における「遊びの鉄人」や、上北小学校における「地区祭り」、熊大附属中学校でのゴミ拾い、熊大附属小学校でのコンピュータ授業、そして出水中学校での生徒とのふれあいといった様々な活動を行ってきた。

大学の授業や教育実習ではできないような貴重な経験をすることができ、この経験は教員になってから生きてくると思う。自分の中で一番印象に残っているのは、天草青年の家での体験である。学校の授業とは違い異年齢の子どもたちが一緒に行動し、ふれあうことができ、様々な遊びを通して仲間づくりをしていくことができた。遊びの中で、子どもの生き生きとした顔や、子どもらしさが多く見られ、と

てもうれしかった。

今回の演習を、教員になった時どう生かしていけるかが大切であり、それによって初めてこの演習が意味あるものとなるのではないだろうか。

受講者3. 最初にフレンドシップ事業のことを知って期待したとおりの内容でした。特に天草青年の家での体験は期間も長かったので楽しかったし一番印象に残っています。私は人と接することが苦手な方でしたが子どもたちとは自然にそれができて、またそのことが自信となり知らず知らずのうちに自分が変わっていくように感じます。つまり、人と人との触れ合いが大事なのではないかと今回いろんな行事に参加して感じました。教育学部の授業にもっと今回のように実際に子どもたちと触れ合うものが増えたらよいと思います。

受講者4. 最初は、少し不安もありました。しかし、天草青年の家に行った時点でその不安も楽しみに変わりました。毎回違った企画が考えられていて本当に楽しかったです。中でも最も心に残っているのが上北小学校での「上北祭り」です。実習では市内の子どもたちとしかふれあうことができません。上北小学校のような小規模学校はなかなか行けないので本当に貴重な経験ができたと思います。地域の人達の見守る中、地域の人々と協力して学校をつくりあげると言うところが印象的で、小規模校に対するイメージが変わったように思います。また、ボランティアやコンピューターで附属の子どもたちとふれあうことができ、よかったと思います。今回で最後というのが本当に残念です。みんなにも是非すすめてほしいと思うし、何よりも私自身がもう1度参加したいです。このような企画をして下さって本当にありがとうございました。この演習を受けて子どもたちとふれ合う事の大切さを改めて感じています。この演習を受けて子どもたちに対する目も少しは変わったのではないかと思います。私自身の事も新たに発見できたと思います。

受講者5. 天草青年の家での遊びの鉄人を皮切りに、この演習を通して色んな経験をすることができた。教育実習では、味わえないような一歩踏み込んだ子どもとの関わりを体験できた。個人的には相手が子どもということで妙に意識して「どう接したらいいだろう。」と固くなってしまつてうまくいかない時があった。子どもに話しかけると

きなどの、話のネタで困ったりもした。

それでも自分が投げかけた事に対して子どもがちゃんと答えてくれたりしたときはうれしい。子どもの行動から自分が学ぶこと、教えられることもたくさんあって得たものも多くある。よく感じていたことは、子どもは相手、大人の行動を注意深く観察しているところだ。だから責任ある行動をすべきだし、相手を思いやった行動を心がけなくてはいけない。現状としては、子どもから吸収することばかりだが経験を多く積んで子どもと平等な人間関係をもって、子どもと一緒に喜んだり泣いたり共感できる立場になりたい。またこのような機会があれば参加したい。

受講者6. やはり「実践」の経験は一番必要なものだったと思った。実践の経験があると講義も聞いていて実感でき、生かすことができる。今子どもたちへの教育には、具体性・実感性が必要とされているがこれは私たち教員養成課程、いや全体の大学でも同じ事である。やはり、実感できる経験を基に幅広い内容に進まないとそれが意味あるものとはならない。また、実践的な経験がなければ講義内容の考え方をそのまま自分のものにするだけで、自分で発見した考え方、自分らしい考え方を生み出すことができないということもあるかもしれない。私は「学ぶ」ということは、まず自分で経験してそれに対しての考えをもった後に、本や講義などで一般的な考え方と照らし合わせるという過程があるのがベストだと思う。教育実習などももっと早めからあった方が学生にとって授業がとても生きたものになると思う。

受講者7. いろいろな子ども達と出会えたが、それぞれの機会で一緒に過ごす時間が短かったのではなかなか親しくなれなかった。自分の力が足りなかったからだろう。私は、緊張しやすい方なので子ども達と話す時も少し緊張した。でも、子ども達が自分を受け入れてくれると安心できた。私は、初対面の子ども達でもぐいぐい引っぱっていけるような力を得られるよう努力したい。

受講者8. 午前中のプログラムには参加できなかったが、午後の講話のみでも貴重な経験になったと思う。今まで、天草に行ったり附属に行ったりして色々な経験をし、実習では、学べなかった地域社会とのつながりなどを学べた。その中で学校の中の子どもの姿だけでなく別の顔を知ることは必要だと思った。その方法の一つが社会教育への参加であろう。私も

教師になる一人として広い視野の持てる人間を目指したい。

受講者9. 天草青年の家の合宿から始まり、5回という少ない機会の中で私は本当にたくさんの経験をしました。2年ということでもまだまだ子ども達との触れ合いの体験が少なかった分発見することや感動することも他の先輩方に比べより多かった気がします。一番印象的だったことは、上北小に行った時のことです。子ども達の素直さ、地域の温かさに触れることができ、今までに味わったことのない感動を受け、「絶対教師になりたい」と心に強く思いました。その時の生徒から最近手紙をもらい大変嬉しく思っています。教師になるにはもちろん大学で勉強することは必要です。しかし、実際頭では分かっているけど子ども達を目の前にした時、思いどおりに行動できるとは限りません。子どもの気持ちを理解するには、直接ふれ合ってみることが一番だと、このフレンドシップを通して実感しました。本当にこの授業に参加してよかったです。他の人よりも一歩も二歩も前進できたと自分で満足しています。これからもこの経験を生かし、夢に向かって努力したいです。本当に貴重な体験をさせてくださってありがとうございました。

受講者10. フレンドシップ事業第2回目、天草の上北小学校の活動に参加できなかった事がとても残念である。その日は体調が悪くバスに乗れる状態ではなかったので休んでしまった。参加した友達に電話したら、いきなり「よかったよー。とても楽しかった。」という答えが返ってきた。ますます悲しくなり、今度からの活動にがんばろうと決意したのであった。この演習は、大学内で行われる講義とは違いとても和やかで楽しい雰囲気で行えたと思う。やはり大学生だけでなく、子どもとともに活動するところにその良さが現れたと思う。私の考えでは、子どもがいると自然に「私がしっかりやらなくちゃ」と思えてくる人が多いのではないかなと思う。もちろん私自身がそうだったので・・・そうすると、自然と大学生が子どもをリードし、子どももそれにのってくのではないだろうか。

最後に、子どもたちはやはり明るくてやさしい人が好きだという事がはっきりわかったので、これからの私は「明るくてやさしい先生」を目指して頑張りたいと思う。

今後の課題

すでに見たように、まったく新しい試みとして企画・実施された今回のフレンドシップ事業は、参加学生をはじめ、ご協力いただいた関係諸機関・学校からも高い評価を得ることができた。また、企画・実践を進めた担当者としても十分に満足できるものでもあった。しかしながら、こうした試みを教員養成学部で授業として、さらに効果的なものにするためには、問題点も少なくない。報告書の最後に、こうした点について検討しておきたい。

1) 受け身の参加から主体的参加へ転換する

今回の内容は、企画された行事に学生が受け身的に参加したものであったが、やはり自ら企画・立案し、実行できるものでなければ、実感を伴った経験になりにくいのではないと思われる。とくに、地元の期待もあり、「第2回上北祭り」に参加する運びとなれば、この点も十分に考慮に入れ、事前準備等を含むスケジュール調整をしてゆきたい。とくに、上北祭りへの参加は、今年度のフレンドシップ事業全体の中でも、保護者や地域の人々とふれあう機会をもつという点でユニークなものであっただけに、こうした点で、さらに学生の参加意識を高めるよう試みたい。

2) 男子学生の参加を働きかける

本年度の受講者は31名であったが、このうち男子学生は5人、わずか16%に過ぎない。男子学生の圧倒的な少なさは、やはり問題であろう。その原因についてここで憶測するのは控えるにしても、こうした事業には男女がバランスよく参加することが望ましい。ただ、こうした傾向は熊本大学に限られたことではなく、シンポジウムにおける講演において、信州大学の土井進氏も、こうした試みに参加する学生は女性が極めて多いことを報告していた。ひと頃、現代の若者が「指示待ち人間」と言われていたが、こうした授業への参加募集に対しても、積極的に動いてみようという傾向がとくに男子学生に弱いのかかもしれない。しかしながら、彼らが一般的に意欲がないとも思われえない。いったん、活動に参加すると男子学生はそれなりのリーダーシップも発揮する。おそらくは、「よし自分もやってみるか」と思わせるかどうかのポイントだろう。今後は、受講を働きかける際にも、今回とは違ったアプローチも考えてみたい。

3) 土曜日に限定しない日程を考える

本年度は、事業内容のすべてが土曜日（一部日曜

日）であった。これは、協力機関や学校の事情からその日が選ばれたのではない。土曜日に行うことは、フレンドシップの企画に当たって、最初から前提にされていたのである。それは、この事業の予算化が決定したのは新学期がスタートした後であり、当然のことながら、学部のすべてのカリキュラムは決定していた。こうした中で、単位を認定する正式の授業として設計するためには、土曜、日曜を前提とせざるを得なかったのである。唯一、附属中学校での事業は当初は週日に計画されていたため、教務委員会において当該事業（1回のみ）は、学生の欠席を了解してほしいとの依頼を行っていた。もっとも、これも結果的には土曜日に実施されることになった。フレンドシップが正規の事業であることを考えると、土曜日実施を前提にしない企画も必要だと思われる。それは、学生の立場に立つことでもある。「本来は休みである土曜日に今時の学生が集まるでしょうか」と、学生の意欲を不安視する声もあった。しかし、意欲的な学生は決して少なくはない。ここで問題なのは、学生の意欲の低さではない。大学においても、土曜日はすでに休日として定着し、彼らはすでに様々な計画を立てていることが多いのである。事実、今回の事業を実施する際にも、「先に決まっていたボランティア活動に参加しなければならないので、欠席させて下さい」と事前に申し出てきた学生は少なくなかった。こうしたことから、学部の授業のない日に、事業を入れさせてもらうといった消極的な発想ではなく、正規の重要な授業として、最も効果の期待できる日程と内容を考えていく必要があると思われる。

4) 学部全体で事業を展開する

本年度の事業は、教育実践研究指導センターが企画・実践した。しかしながら、「子どもとのふれあい」は、教育活動そのものであり、教員養成にかかわるすべてのものが関与すべきものである。そういう意味で、企画・実践の窓口はセンターが中心的に行うとしても、今後はさらに学部教官の積極的な参加が必要である。具体的には、まずは教務委員会において、フレンドシップ事業についての検討がなされることが期待される。そうした手続きを通して、フレンドシップ事業の重要性が学部全体に認識され、全員参加のもとで事業が展開されることになる。

参考文献

熊本大学教育学部附属教育実践研究指導センター・熊本大学教育学部 1998 平成9年度熊本大学教育学部フレンドシップ事業報告書。